

論文集原稿チェック票

原稿提出にあたっては、「執筆要領」、「版下原稿執筆の手引き」と合わせてこの「原稿チェック票」をご確認ください。

原稿の形態

☐ 版下原稿は、カメラレディーの状態の原稿です。基本頁登載料は2万円、レイアウト原稿は、印刷所で組版するもので基本頁登載料は4万円です。

☐ 原稿は1頁1枚です。

☐ 原稿の余白は、上端20mm、下端30mm、左右各15mm、段の間6mm。

☐ 1頁は和文の本文相当で、3,000字、本文は、1行あたり30文字で1頁は50行2段組。

(本文：30字×50行×2段＝3,000字；参考文献等：34字×60行×2段＝3,700字)

1頁目は表題、氏名、英文要旨、キーワード、所属機関等の記載分だけ本文記入が削減されるので、2頁目より、本文3,000字とする。

☐ 英文の場合の文字数の換算方法は1頁当たり850語程度とし、本文1段組、50行を原則とする。

表題と氏名

☐ 大会学術講演会または支部発表研究会に発表した研究、その他研究発表会、シンポジウム、一般的に公表されていない報告書などにおいて発表のものは、その発表場所・時期を脚注に記する。(脚注とは第1頁の罫線の下を指します。)

☐ 共通する主題のもとに連続する数編を執筆する場合、表題は個々の論文内容を表現するものとし、総主題はサブタイトルとして、その1、その2などを付す。応募規程3を参照。

☐ 英文氏名は、名を先に姓を後に書く。名は先頭文字のみ大文字にし、姓は全てを大文字とする。

☐ 各人の氏名には「所属機関・職位」記入との対応を示す肩つき記号を付ける。

英文要旨

☐ 氏名との間は本文相当1行以上空白をとる。

☐ 左右を本文相当2文字づつ空ける。

キーワード

☐ 英文要旨との間は本文相当1行以上の空白行をとる。

☐ 左右を本文相当2文字づつ空白をあけ、なるべく中央に割り付ける。

☐ **Keywords:** (太字斜体) としてください。

☐ 英文キーワードはイタリック体 (times new roman) が望ましい。

☐ 和文キーワードは斜体ではなく、本文と同じ立体です。

☐ 和文キーワードはゴシック体ではなく、本文と同じ明朝体です。

☐ キーワードの文字の大きさは、和文、英文ともに本文と同じ8ポイントです。

☐ 本文との間は本文相当1行以上の空白行をとる。

所属機関

☐ 著者名に対応する肩つき記号を記入する。

☐ 学位の表記は自己申告による。

本文

☐ 本文および注・参考文献の文字種別は、和文の時は明朝体、英文の時はローマン体。

☐ 本文の字の大きさは、8ポイント。

☐ 章・節の表題文字は本文と同じ大きさとし、ゴシック体が望ましい。

☐ 章・節の表題文字等は太文字ゴシック体になると潰れてしまうので標準ゴシック体になしてください。

☐ 章と章との間は1行空白行をとる。(節と節の間は空けなくてもよい。)

☐ 図・表・写真と本文の間は1行以上空白行をとる。

☐ 図・表・写真の横には原則として本文を組み込まない。

☐ 図・表は印刷仕上がりで十分に判読出来るよう、鮮明かつ適当な濃度で作成する。

☐ 図・表・写真の表題記入位置は、図・写真の場合その直下、表の場合はその直上とする。

☐ 図・表・写真の表題にはそれぞれ、英文表題の場合は、Fig.1, Fig.2, …, Table1, Table2, …, Photo.1, Photo.2, …、和文表題の場合は図1、図2…、表1、

表 2・・・、写真 1、写真 2・・・、など章ごとに分けずに通し番号を付ける。番号と表題の書体はゴシック体、表題は英文表記を推奨する。文字の大きさは8ポイント
(例) 図1 ゴシック体

□ 図・表・写真の表題の番号には【】 □ ー(ハイフン)。(ピリオド) : (コロン) などを付けない。□ 謝辞は本文に含まれ文字の大きさは本文と同じ8ポイント、本文の最後に置く。

□ 英文要約 (600 語以内) は本文の書体で論文の末尾に改行し付ける。和文要約 (3,000 字以内) は本文の書体で論文の末尾に付ける。

注および参考文献

- 注および参考文献は、本文の後にまとめてそれぞれを使用順に番号を付ける。
- 文字の大きさは7ポイント、1行34文字、この行1行は本文0.8行。
- 参考文献の番号は、本文中の引用個所に肩つき 1), 2) のように明記する。
- 参考文献は、原語標記とする。正式な英語訳がある場合は、英語表記を推奨する。
- 注の番号は、引用個所に肩つき注 1), 注 2) のように明記する。
- 論文等の場合「著者名：表題、誌名、Vol., No., 掲載ページ、発行年月」の順とする。
- 日本建築学会大会学術講演梗概集には分冊を入れてください。
- 単行本の場合「著（編）者名：書名、発行所名、発行年」の順とする。
- 発行年月は、原則として西暦で「1998.1」「1998.2」のように記す。
- 電子文献については「科学技術情報流通技術基準(SIST) 参照の書き方」

http://sist-jst.jp/handbook/sist02_2007/main.htm を参照してください。

- 記載例を見本にして書体、書式、記載順などをご確認ください。例えば注、参考文献はゴシック体で表題を統一しています。複数行は2行目を1字下げます。

参考文献

- 1) Luco, J.E. and Westmann, R.A.: Dynamic Response of Circular Footings,
Journal of the Engineering Mechanics, ASCE, Vol.97, pp.1381-1395,
1971.4
- 2) 佐藤武夫, 川島定雄, 三木韶 : 音響透過に関する実験 (第3報) 材料
に対する音の投射角と遮音効果, 建築学会論文集大会号, 第1号, pp.
210~217, 1936.3
- 3) 内田祥三 : 木造仕口の実験的研究, 建築学会論文集, 第2号, pp.21~30,
1936.7
- 4) 中村達太郎 : 日本建築語彙, 丸善, 1906, 新增補版 1956

注

注 1) Zhuguo LI, THEORETICAL INVESTIGATION ON RHEOLOGICAL
PROPERTIES OF FRESH CONCRETE, Journal of Structural and
Construction Engineering (Transactions of AIJ), pp.895-904, Vol. 78(2013), No. 687

注 2) 「大工頭中井家文書」(史学第 37 巻第 1 号~第 46 巻第 1 号) 105 によると、
柴重右衛門が中井大和守の配下で勘定方を担当していたことがわかる。ま
た長香寺寄託中井家文書に「慶長十五年十九年、駿河御用少々記」と題す
る留帳があり、その中の「駿河御城大工作料方にて渡手形之覚」と慶長 15
年 11 月 15 日中井信濃守が作料を請取った旨を柴重右衛門、村伊右衛門に宛
てた覚書の写しで、この両名が中井家の勘定を担当していたことを示して
いる。

その他

- 投稿画面の別添部数欄に、別刷りを希望しない場合は0部、希望する場合は部数（100 部単位）をご記入ください。

- 名称変更の経緯

1936 年 3 月論文集第 1 号「建築学会論文集」刊行

1947 年 6 月「日本建築学会論文集」と改称 (第 32 号~)

1956 年 6 月「日本建築学会論文報告集」と改称 (第 56 号~)

1985 年 1 月「日本建築学会計画系論文報告集」と「日本建築学会構造系論文報告集」
に分冊し、改称

1994 年 1 月「日本建築学会計画系論文集」と「日本建築学会構造系論文集」
に名称変更

2003 年 4 月「日本建築学会環境系論文集」を新設